第二十五號

SOCIALISM ＝ ソーシアリズム ＝ 社會主義 ＝ 社會主義は土地、資本、其他あらゆる生産機關の公有を主張する者なり

直言は日本社會主義の中央機關紙也!!!

來るべき専制力

日露戰爭の破裂に際して、吾人は世の主戰論者の盛に戰爭の効能を吹聽するを聽けり、吾人亦た彼等が爲せる所に倣つて戰爭の政治上に及ぼす結果を述べん、吾人は古來戰爭の教訓より歸納して、專制主義の發達を否認すること能はざる也、或は曰く外戰は專制主義を助長し、内戰は共和主義を助長せりと、若し其の結果に就て之を言はゞ、論者の言頗る其要を得たるを思ふ、

然れ共何等の戰爭か利益の爭奪ならざる、唯た時勢の變化は利益爭奪の外觀を異にせしむるに過ぎざる也、羅馬とカーセージとの戰爭[illegible]も、皆な利益の爲めなりし也、[illegible]を以て帝王將軍の功名心を奬勵し、多數の愚民は戰爭てふ偉觀に眩惑して之に[illegible]せり、故に所謂戰捷の結果なるものは、投機商賈の懷中を肥やし、帝王將軍の虚榮を增して、而して[illegible]を苦しくするに過ぎざりき、是れ吾人が何千年來の實跡に照らして毫も疑ひなき所也、

今日に至りて戰爭の効果を算するものは曰く、戰爭は内に在りて工業を奬め、外に向て商權を擴くすと、吾人は謂へらく是れ今日戰爭の結果に非ずして原因也、是れ戰爭の唯一原因なりと、然れ共一般國民は記憶せざるべからず、工業の奬勵と商權の擴張とに依りて内地の人民と世界の同胞とが普く其の福澤に浴するに非ざる也、「利己主義」一たび人生の生命となりてより以來、農と工と商とを問はず是れ一般人類の利用厚生を目的とするに非ずして、唯だ特權階級の私利手段と化し了れり、而して彼等が智識の進步、機械の發明、交通機關の發達てふ人生社會の一般名譽を壟斷して私利の經營に汲々たるや、所謂生産の過剩となり、販路の競爭となり、土地の侵掠となり、殖民政略となり、軍備擴張となり、戰爭破裂となる、而して人多くは之を讃美して「文明」と呼ぶ、吾人の了解すること能はざる所以也、

試に日本が同盟の光榮を誇稱する英國を看よ、彼は何か故に軍費を歐洲諸國に供與して以て奈翁と戰ひしや、是れ其の外國貿易を保せんが爲めに非ざりしや、戰捷の英國にロバート、オーエン現はれて社會主義の第一聲を放ちたるもの實に故ある也、賠償なる輸出品は皆な是れ勞働者の汗血を絞れるものに外ならざりければ也、諸國の工業未だ發達せず、英國尚ほ海外貿易の利權を占領せる間、彼は其の海軍を擁して「光榮ある孤立」なるものを誇りたり、獨に米に露に、工業發達し商權擴張し、英國の勢力日に蹙るに及びて彼は最早傲然其の孤立を守ること能はざるに至り、其の東洋に於ける利權擁護の方便として爰に日本を誘致せるのみ、既に今日の如き世界的競爭の事情に遭遇したる限り、英國が過去に於ける工商上の優勢地位を維持すること能はざるは論なき也、英國政治家の煩悶一に此に在り、日英同盟の如き其の窮餘の一策に過ぎざるに非ずや、日本國民が、古來孤立を誇りたる英國の手を伸ばして我を握りたりと云ふを以て無上の光榮となし、今に至て尚は之を悟らざるが如きは、吾人の慚愧に堪へざる所也、

吾人は日本の政論家諸君が、最早や正義人道を以て戰爭を回護するの必要なきを信ず、サスがに當局者程ありて農商務大臣清浦君は、幾度も當代戰爭の原因の國際貿易の競爭に在ることを演說せり、戰爭の原因にして國際貿易に在ることを知るものは、又た之に優勢を占むるの條件が生産費の低廉に在ることを主張するならん、彼等は自ら可成的多く儲けざるべからず、而して可成的多く生産費を減せざるべからず、資本家合同の畫策せらる、精巧機械の新設せらるゝ、而して勞働者の賃金の削減せらるゝ、勞働者の結合の禁厭せらるゝ、皆な是れが爲めに非ずや、故に今日世界の政治なるものは、資本家階級の利益の擁護にして、所謂東洋問題とは、世界各國の名義に依て、彼等が未開の東洋に遺利を爭奪するの別名に過ぎず、其の傲慢と暴慾とは世界の良民が永く甘受し得べき所に非る也、

△無意味なる憲法 憲法は之を法律に委し、法律は之を行政長官に委し、行政長官は之を一小屬吏に委す、斯くて日本臣民の自由は一小屬吏の手に依て左右せらる噫！（第二頁記事參照）

△憲法の上に警察あり 憲法は言論印行の自由を吾人に與へ、警察は之を吾人より奪ふ、憲法は集會結社の自由を吾人に與へ、警察は之を吾人より奪ふ、警察は眞に巧妙の機關なる哉

△政府の詐欺的迫害 其の陸海軍と警察とを以てして、猶は人民を壓伏すること能はず、其の教育機關と其の御用新聞とを以てして、猶は人心を指導すること能はず、陰險なる詐欺の術を以て纔かに一時の安を偸まんとす、是れ今の政府の遣り方也（第二頁「陰險なる迫害」の記事參照）

△野に叫ぶ人の聲 田中正造翁、谷中村買收の爲に出張せる官吏を見て叫んで曰く、是れ泥棒なり、村泥棒なり、早く此泥棒を捕へよと、眞に是れ野に叫ぶ人の聲也（傳道行商記參照）

幸徳君の出獄 歡迎

◎待に待たる幸徳秋水君出獄の日は近づけり、彼は來る廿七日を以て五箇月の刑期を終り、翌廿八日午前五時を以て巣鴨監獄の門を出んとす、吾人豈に多少の心設なきを得んや

◎吾人は先づ『直言』第廿六號が來る三十日發行の筈なるを二日だけ繰上げ、彼れの出獄當日（即ち廿八日）發行と爲し、多少の裝飾を紙面に施し聊か以て歡迎の意を表せんと欲す

◎次に吾人は當日午前五時迄に巣鴨監獄門前に集り、夏の旦の涼風の中に、一刻も早く彼れの懷かしき顏を見んと欲す、但し吾人は必ずしも多數なる同志友人の會同を望むに非ず、唯だ志し厚く、而して幸ひに便宜ある諸君の來會せられんことを待つのみ、幸徳君自らも亦た（數日前面會に趣きたる夫人に托して）態々出迎などの要なき旨を吾人に通じ越せり

◎其他の事共に就ては、後日更に報する所あらんと欲す

平民社同人

THE CHOKUGEN.
SOLE ORGAN OF JAPANESE SOCIALISTS.
Issued every Sunday.
Communications addressed to the Heiminsha, Tokyo.
Vol. II. Tokyo, July 23rd, 1905. No. 25

A KIND LETTER FROM A FOREIGN COMRADE

San Francisco June 25, 1905.

Comrade Sakai and Kotoku;

Received your letter and the "Chokugen." In reading the result of the election on the 16th and the suppression of the literature previous to the election,—and the government's prevention of Comrade Kinoshita from speaking, the question naturally presents itself. Why, if he is as powerful as represented? According to the many press despatches, the success of the Army and Navy of Japan over the vast Army and Navy of Russia is due to the power of the Emperor—the "Son of Heaven." If the "Son of Heaven" is powerful enough to vanquish the Russian Army and Navy, he certainly ought not to be afraid of ....

It looks to an outsider in this country as though something was rotten in regard to..........................

No government can stand absolute liberty of speech and press. Let us hope that those thirty two votes are the beacon light to absolute individual liberty in Japan. The ....is making a great mistake in flirting with Christianity by his present of money—a close study of its effects in this so-called "Christian civilization" ought to convince him of his error. Liberty loving comrades all over the world will honor the few brave women and men who are fighting for a foothold for it in Japan.

Conscious of the truth in your great battle for freedom, you can say with Buddha, "He who fosters in his heart the love of truth will live and not die, for he has drank the waters of immortality." Yes, Comrades of the world are in sympathy with you and joy in your joys and sorrow in your sorrows. Many eyes all over the world are looking through the bars of the prison cell of Comrade Kotoku and will joy in his release from persecution.

I should be pleased to receive a letter written in Japanese from Mrs. Kotoku. I shall value it, not only for its literary merit from the freedom loving woman of Japan—the advanced guard, but a literary souvenir from the land of the Cherry-blossom.

....

Yours very sincerely
Albert Johnson.

（平民社電話 本局三一六二番）

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

日本之新聞

○鐘淵紡績の職工待遇

鐘淵紡績會社は去廿日の諸新聞紙に一頁全面大の廣告を出だし、先づ『會社の財政及び營業の方針』を說きて其の財政の基礎の鞏固なるを誇り、次に『會社財産の保全』を說きて、保險其他の施設の至れるを示し、最後に『會社の職工に對する設備及び待遇』を說きて、大いに世間の體裁を作り、職工の來集を勸誘せり其の言ふ所左の如し

△職工の熟練は器械の大切なるが如く亦工場に必要なる一の無形財産なるが故に、職工に對する設備待遇は常に會社の熱心に實行を期せるところにして、本年六月一日より獨逸クルツプ會社の制に倣ひ、鐘紡共濟組合なるものを設け、之れを自治制度とし、職工及使用人が病氣又は災害に罹りたるとき、其生計を保護救助し、死亡の場合は葬式費用及遺族扶助料を給し、猶一定の期間勤續するときは退社の後と雖も年金を給することゝせり

△其六月中の收支計算は、組合員醵出保險料參千五拾圓、會社補助金金參千五拾圓、合計六千壹百圓にして、內支出救助金、遺族扶助料、葬式料、合計壹千貳百圓にして、差引殘額四千九百圓となれり、壹ヶ月間の殘額此の如しとせば、幾ヶ年の後に至れば其資金は巨額に達すべし

△更に會社自身に於ても、當季利益金中より金拾萬圓を割き、五萬圓を職工等福利增進資金に、五萬圓を使用人恩給、老衰、退職、恩給資金に積立たり、其他已に積立ある職工衛生資金貳萬圓あり、又特季積立にある職工救濟資金現在殘額金貳萬壹千三百圓ありて、共濟組合の救濟以外に、會社自ら救濟せる金額當半季中四千五百圓に達せり

△斯の如くして、當會社に勤務せる使用人及職工は病災に罹り、又は老衰に及び、或は不慮に遭ふも、共濟組合の救濟と會社の給與とにより、安全に生計を營むことを得べく、亦從業員の憂なきのみならず、會社の隆盛と共に次第に其幸福を增進せんことは當會社の期するところなり

職工者福增進資金と云ふが如き何ぞ其名の美にして床しげなるや、吾人は先づ鐘紡會社當局者の多智に敬服せざるを得ず、然れども是れ果して眞に會社の隆盛と共に勞働者の幸福を增進するに足るものなりや、會社は當半季間に於て實に百五十五萬圓餘の純益を得たり、株主は實に一割六歩の配當を得たり少數なる役員の賞與金すら五萬圓に上れり、然るに幾千の職工に對して救助基金僅々十萬圓支出せられたり、而も此の十萬圓は資金なり、實際分配せらるゝものは其の利子のみなり、是れ豈に眞に勞働者の幸福安全を保證するに足らんや、彼の兵卒が國家社會より受くる保護救濟の方法を見よ其名のみを聞けば遺族扶助料あり、軍人援護會あり愛國婦人會あり、奬兵義會あり其他種々の名義を以て軍人及び其の遺族家族を救濟保護すと稱するもの殆んど數ふるに遑あらざらんとす、而して、實際兵卒の遺族家族は饑餓に泣きつゝあり、盜賊を爲しつゝあり、賣淫を爲しつゝあり、嗚呼是れ何の故ぞや、名の美なるもの其功必ずしも大ならざるが爲めに非ずや、然らば則ち紡績會社の事、亦た豈に之に類するなきを知らんや、況んや一方に於て救濟保護の法立つと雖も、日々の給料が賃銀の鐵則に依りて永久に其の最低度に止まるに於てをや、況んや其のみ働時間が十時間より十二時に、時としては十四五時間に達するに於てをや、平民階級は宜しく常に資本家階級に對する監視を嚴重にして、斯くの如き、甘言好餌に對し、細かに其の將來の實効を點檢せざる可らず、然れども『少し』は『皆無』に優れる、鐘紡會社の此の施設亦た決して無益に非ず、只だ此際須らく記臆せざる可らざるは、此の施設が決して彼等資本家の任意の善行に非ざるの一事なり、由來改革の業は恐怖に依りてのみ成し遂げらる、權力者が恐怖を感ぜずして自ら大改革を成せること、史上曾て半個の前例を見ず、さらば此の些々たる改革事業も亦た勞働者の要求の一部が纔かに容れられたるものにして、畢竟是れ平民階級覺醒の結果に外ならず故に彼等資本家が歐洲の資本家(例へばクルツプの如き)に倣ふ間、吾人は又歐洲の社會黨に學びて、大いに彼等と對戰するの覺悟なかる可らず

○大阪電燈會社總會の紛紜

同社は去十八日株主總會を開き、決算案の報告を爲すや一部不平株主中の鶴見某起つて同社所有鳳凰炭山の質問に及ぶや、佐々木政又氏其無用なるを難じたるより、鶴見氏は躍起となり椅子を振上げ打つて掛らんとせしも、之を引留る者あり漸く沖靜に歸したりしが、同派の一二株主等は尙ほ頻りに質問の矢を放ち、何時終る可くもあらざりしかば議長は一時休會を命じ、再び開會したるも、亦繰返し種々の質問出で、容易に止むべくもあらざりしが大株主等は堪へ難くやありけん、討論終結を呼び採決の結果、大多數を以て利益分配案並に佐世保臨時支店設置を原案通り可決し、引續き監查役の滿期改選に移りしに、又しても投票若くは選擧委員選出方を主張するものありしかば、一般株主は堪へ難く感じけん、續々退場し、殘りの株主丈けにて投票を行ひ總て再選に決し、十二時頃閉會したりと、會社の總會も亦た帝國議會と同じく大黨派の勝手次第なるを見るべし

○豪農の無慈悲

埼玉縣入間郡宗岡村豪農内田卯之助は小作人に對し無慈悲の振舞多かりしが、其小作人の一なる同村尾崎喜藏方にては、長男多四郎が本年一月中召集されて出征し、農業に一人の手が不足したる處へ、霖雨の爲め麥の收穫も減少したる故、小作金の納付の延期を泣付きたるが、無慈悲なる内田は之を許さず、小作金の納付が出來ねば畑に在る現品の麥を刈りて取揚げるに親先よりの家例なりとて、悉皆之を押收したる故、喜藏は大に弱り果て、此有樣では餓死するの外なしと嘆き居たる折柄、六月十日戰死したりとの報知ありて、悴の遺物を贈られしに、更に恩賜金四圓を手に入れたるに之を内田に渡して、悴の遺物まで取收されし麥を取戾さんとしたるに、内田は『此金子は其不足の分へ受取つて置く』と取揚げ、麥は其儘渡さゞる故、喜藏は大に失望して悲嘆に暮れ居れりと(東朝記)

○貯蓄債券月賦拂の奸計

貯蓄債券の發行以來、國民の射倖心を利用し、月賦拂ひの方法によりて債券の募集を爲すもの續々現はれ目下東京市中のみにても其數十幾に近からん、嗚呼是れ自然の勢ひなり、政府が人民の射倖心を利用して富籤發行を爲せる以上、他の奸計者が之を躍せんとするも是れ到底不可能の事たり、見よ利付五圓の債券が僅々四圓未滿の市價を有するに拘はらず、猶ほ之を買ふ者あるにあらずや、富籤に非ずんば誰か斯かる損失を敢てせん

○工場法案

いよいよ次期の議會に提出せらるべしと、再び幽靈たらしむる勿れや

○電燈會社の合併

東京電燈會社と深川電燈會社とはいよいよ合併の契約成立したり

○青眼白眼

△此頃上流社會に大分佛蘭西語がはやる、茶の湯、香花、佛蘭西語と云つた樣なものだらう△東京市の養育院に二百餘人の老婆が居るが、其の前身を聞くに、半は之れ曾て花柳界に才色を誇りし者△惠比壽麥酒會社は二割五分の配當をした、其の職工は幾ら日給を貰つて居るだらう△淺野總一郎が芝の田町に一町內ブチ通しの高塀を結ひめぐらして邸宅の壯大を誇らうとしたが、上村鉋吉といふ見かけはケチな野郞があつて、どうしても其の地所を賣らうと云はぬ、二萬五千圓といふ、分外の値を付けられても、イツカナ承知せぬと云ふ事だ、

○時事日記

▲十五日 △萬朝報アグアンの特赦を謀報し、附記して曰く『聖恩の洪大無邊斯る外人をも包容し給ふ、大御心の廣く深さに感泣するあるのみ』△今朝報『甘露寺伯爵へ御降嫁遊ばされたる滿子女王即ち元北白川宮妃殿下』がアンナー嬢の許に通ひて佛語を學ぶ由を記し、『感ずべき篤學にあらずや』と贊嘆し來る

▲十六日 △萬朝報恭しく『各宮孫殿下の御近狀』を報す△萬朝報又アグアンの特赦を謀報し、『皇恩四海に光わたるを壽ぎ奉るのみ』と申す

▲十七日 △萬朝報アグアン及び牧宏の二人特赦を報じ『何につけても尊さに聖天子の御恩徳がな』と感泣す△國民新聞報にして曰く『川村花子嬢は鐵太郞伯の令妹にして麹宮淳宮兩殿下同伯邸に御座あらせられしころに兩殿下に侍づき奉りたるが、此度柳原義光氏と結婚せんとすと

▲十八日 △國民新聞門外漢記して曰く『アグアンの特赦、實に聖恩洪大を極め中饑世界列國何れも皇恩の聖德無邊に感激するなる可し』

○陰險なる迫害

政府の吾人を迫害するや、其の警察力を以てして足らず、遂に種々陰險卑劣の手段を用ゐること、吾人の既に屢々記載せる所の如し、然るに此頃亦た最も甚だしき者あり左の文字を熟讀せよ

△歸國せば直ちに捕縛 郷里の父より來信の一節、『其方の身の上につき警察より公に令して色々と申來り、其方が東京にて社會主義及び直言に關係し居るに付、此の夏休中に歸國せば直ちに捕縛する筈なりとの事にて、兩親共大いに心配致居候』(山田滄海)

世上の形勢に暗く、政府の權力を恐るゝ地方の善良なる老人を欺き、其子を捕縛すべしと強迫して其心を苦め、此の親子の情の苦悶を利用して反對黨撲滅の政策と爲さんとす、其の冷酷無情、其の陰險卑劣、眞に謂ふ所を知らざるなり、序に左の一小事實を附記す

△平民社立退を命ぜらる 平民社は數日前其の家主より、八月中に立退き呉れとの要求に接したり、其の要求は甚だ婉曲なり、然れども其の理由は一向分明ならず、平民社にては未だ何等の處分をも爲さゞる由なるが、是は直ちに敵の時節轉換期間中の新任挨拶にてはあらざるなるべし

●木下尙江氏の遊說

▲關西遊說中止 木下氏は去十七日を以て大阪紀州に向ひ出發の筈なりしが、其前々日急に胃腸を損じて病臥の身となり、關西遊說は遂に中止の不幸を見るに至れり、他日更に計畫するの機あるべし

▲東北遊說 木下氏病漸く癒えなば程なく東北に向つて出發すべし、其の日割豫定凡そ左の如し

△八月一日 東京出發 △二日 福島市
△四日 熱岡町 △七日 福島市
△十日 仙臺市 △其他未定

●チラシの色々

左の四種のチラシ御入用の方は表題を指定して御注文あれ、御送金には郵便切手にて宜し、實費一枚約一厘と郵税とを見積り、相當の枚數を計算して直ちに發送いたします

△社會主義の歌 △社會主義とはドンナ者
△社會主義と女子 △社會主義の歌
△外に配布用として『直言』の舊號を要せらるゝ諸君には無代價にて進呈す、郵送用の切手を封入して御申込あれ

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

世界の新聞

○鐵道會社員の同盟罷工

北米ミシガン州サジノウ市の鐵道會社雇人は、六月四日より同盟罷工を爲せり、主要なる原因は勞働時間並びに條件の問題に在りて、雇人員等は雇主の命令の實施に反抗したり、蓋し其命令に依る時は午前四時より勞働に出で、深夜に至らざれば休息する能はざればなり、是より以前に於ても彼等は其勞働に堪へ難しとて時間中既に時間短縮の要求を爲せしとあり、然るに會社は却て反對の處置を爲せしより、彼等は直ちに罷業して乘車することを拒絶せしなり、此に於て紳士閥政治は多くの探偵を放ち、會社は頻りに同盟罷工破壞者を傭ふ所によれば、會社は、同盟罷工破壞者には一日五弗の金を與へ、同盟不加入者には一日二弗より三弗を與へんとを宣言せりと云ふ

而して同盟破壞者は現はれ來れり、而して破壞者の一人により、[illegible]の一若手は行はれたり、報導に曰く、ハーリスと稱する同盟破壞者が、一小公園に數名の勞働者あるを監視しつゝありの時、少年の一群は來りて彼を罵れり、ハーリスは怒りてピストルを放ち、一少年を殺し、三人に負傷せしめ、而して警察官の爲に捕はれたり

△被害者少年の葬儀を終へて、多數人の集會は勞働館に於て開かれ、市街鐵道勞働者の總領マハン氏及び一個侶の悲壯慷慨を極めたる演説ありたり

△銃殺せられし少年は今年十七歳にして、彼が貧しき家には一人の母殘り居るのみなりと云ふ

而してシカゴ中裁局及び市民委員に報導せられし所に依れば、未だ仲裁は希望せられずと言ふ、且つ同地に在る瓦斯電氣及び鐵道會社のサジノウ聯合は一意唯だ配當の多きに勉め、之に對する市街鐵道勞働者協會は勞働條件の改善に勉めつゝありて、階級鬪爭は益々烈激を致し居りかくて政府と軍隊を有する資本家等は愈々暴虐を極めんことを準備しつゝあり、『ソーシアリスト』新聞は曰く、諸君が此の暴民に報ゆるは實に諸君が投票函に向ふの時に在り

○獨立勞働黨共働組合連合大會

六月中旬、共働組合はペースレーに於て其定期大會を開會したるが、之に先つ數日、一大デモンスツレーションは、同地獨立勞働黨支部の庇護の下に同地クラークタウン會堂に於て行はれたり、ムクナップ氏座長席に就き議事を開きたるが、其主たる決議は、國會及地方議會に獨立勞働黨の代表者を選出するを可とするものにして各地方の勞働團體は皆獨立勞働黨に連合すべしと云ふにあり、此決議はグラスゴーのバルヂエス氏（勞働黨代議士候補者）、ダンカンのチエス氏（自候補者）の提出に係るものなるが、イシドール・ルキック氏（ブラッセル）、ケヤー・ハーヂー氏（代議士）ジョンストン氏（マンチエスター）ロバート・スミリー氏（勞働候補者）等順次所感を述べ、ケヤ・ハーヂー氏は其演説中に左の言を爲したり

國家の全機關を用ひて共働組合事業の成長發達を妨遏せんとする時は方に近きつゝあり、共働組合員にして其代表者を議會に有せず、獨立勞働黨者し彼等の利益の防護に力めずんば、彼等は何を以てか、自己の利益に反對する諸勢力に對抗するを得ん、故に勞働黨を助くるは即ち各自の利益を防護する所以也

○英國失業者の決議

失業者法案は今や議會委員の手中に在り失業者の示威運動は大々的に英國諸地方に行はれつゝあるが、其決議文は悉く同一にて左の如くなりと

勞働者の本大會は、去る一月リバプールに於て開かれたる、勞働代表委員特別會の宣言、即ち、失業問題の原因を獨占と、適當なる産業組織の缺乏とにあること、本問題解決の爲に地方團體に充分なる權限を與ふること、政府自ら大公共事業を起すべきこと、勞働大臣を新設することを論じたる宣言を茲に更に確認し、又失業法案が失業者に職業を與ふべき責任有司にありと認むるの點を承認し、且つ本案をして充分の効力あらしめんが爲に、全國を通じて實行されんことを希ひ猶ほ賃金率の上に制限を設くるあらゆる條項を廢棄せられんことを望む、故に政府が是等主旨に依りて失業法案に改正を加へんことは本大會の切望する處也

○社會主義日曜學校

獨乙に於ける數箇の社會主義日曜學校の擴張は、頗る世の稱讃を博するに足るものあり、同校に於ては生徒は毎週三ペンス宛を學校に持ち行けば足ることになり居り、經費は多く寄附によりて集めらるゝものなり、出金名簿は總ての民主的又は進歩的なる、政黨事務所、工場等に割り當てられ、而して幼年生徒は成年者の監督の下に、集金箱を携へて是等の場所を廻はりつゝあり其の財政の狀も頗る好況に向つて進みつゝありといふ、獨乙一通信員は之に加へて曰く、獨乙に於ける一大有力なる勞働運動は此中より起るべしと、然り、眞に生命ある事業は先づ教育より始ざるべず

○佛國大革命前に髣髴たり

露國に於ける示威運動は、軍艦全滅の報に依りて至大の影響を受けたり、今は單に革命運動たるに止まらず、兼ねて亦非戰十字軍たり、平民は極東に於てその夫子兄弟の無造作に屠殺せられつゝあれば、熱心に日本との戰爭を止めんことを要求しつゝあり、而して富者の家族家財を引纏めて國外に出奔する者は引きも切らず、其無秩序、無法律の狀は大革命前の佛國に髣髴たるものなりと、

○ライセスターの失業者倫敦に向ふ

英國ライセスターの失業者五百人は、隊を爲して遠く倫敦に向つて進發したり、之を督率する者は僧侶トナルドソン氏にして、生憎の降雨にもめげず、沿道有志の同情を得て其進軍を續けたるが、倫敦の同志は、其到着を待ちて歡迎的大示威運動をハイド公園に行ふの計畫なりと、知らず、同國議會に於ける失業者問題は如何の解決を見るべき乎、吾人は遙かに彼等の成功を祈る、

○匈牙利勞働組合の進歩

近時佛國の新聞『勞働運動』は、匈牙利に於ける勞働組合の發達を報導したり、

△匈牙利に於ける勞働組合の第一回の大會は、去る一八九八年に行はれしが、其時に於ては、總て二萬三千六百三人の組合員を有する六十一箇の團隊ありて、之を代表して、出席せる代表者百四人ありたりしが昨年に至りては驚くべき多數の増加を見たりと

即ち、昨一九〇四年の一月より六月までの間に於ける組合員の増加は、男子の數三萬四千七百六十八人を五萬六千三十三人となし、女子の數を千六百四十五人より千七百七十三人となせり、而して其中多數を占むるものは、煉瓦工及び印刷工なりと云ふ

○伊國共働同盟の開墾計畫

伊太利に於ける共働同盟は、今回非常に廣大なる公有の未開墾地を買ひ受けて、之を開拓し、以て種々大仕掛の産業を營まんと計畫し居れりといふ、一方に大活動を爲さんと欲せば、其の反面に於て最も着實なる事業を設立せざる可らざるは必須の要件なり、吾人は日本の社會主義者が少しく此に意を注がれんことを希望する者也、

○露國婦人の大會

婦人の大會はモスコウ府に於て開かれ、同國の各地方より集まり來れる婦人五百名の多きに達せりと云ふ、而して彼等は此の大會に於て、一決議をなせり、其の要旨は、男子と女子とに對して同等の權利を賦與することと及び代議政治を開くことを熱望するに在り、東洋の優柔纖弱なる婦人者流は宜しく慚死して可なり

○北米三州社會黨の知事候補者

オハイオ社會黨は去五月二十九、三十の兩日同州コロンバスに於て大會を開きてクリーブランドのアイザック・カウワン氏を州知事候補者に推したるが、ヴアシュア州社會黨亦、五月廿八日リッチモンドに於て大會を開き、ジー、イー、モリス氏を同候補者に選びたり。

○北米ロードアイランドの指名會

ロードアイランドの社會黨は、六月四日プロビデンスに於て年會を開きたり、ゼ、ダブリユー、ヒッキンス氏座長となり、諸般の報告決議ありたる後、州官吏選舉の件に移り、悉く再撰に決したるが、知事候補者はワーレン、エー・カーペンター氏なりき。

運動基金募集

去十四日より廿一日迄の受付左の如し

△金五十錢　芝區　武田氏
△金六十五錢　越中　無名氏
△金五十錢　兵庫　小山香作氏
△金壹圓　武州　山中茂緒氏
△金六十錢　同志會

合計金三圓廿五錢也

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

●社會主義と婦人の道徳

（「社會主義と婦人」の一節）　山口孤劍

ショッペンハウエル曰く

少さき肩と、狭き胸と、大なる臀と、長き毛髪とを有てる虚栄心のみ盛んなる動物、名けて婦人といふ、

吉田の兼好法師は、其徒然草に記しつけて

女の性は皆ひがめり、人我の相ふかく、貪欲甚し

と、余嘗て米國マサチウセッツ州の紡績會社の一女工が、寄宿舎の二階より通行人を眺めつゝありしが、馬車をきしらせて來る盛裝花の如き貴婦人を眺めたる彼女は、羨望の情堪ゆる能はず、かへりみて自己の境遇の不幸を嘆じ、手巾を以て縊死せしことを「レーボアリーダー」に讀みしことあり、女賊の徑路を見るに、多くは初めこの羨望の情之れを誘ひしものにあらざるはなし、人豈に生れて盗むことを喜ばんや、

社會主義は曰く凡ての婦人をして、財產と位置とは利と幸福の平等を確保せしめ、誰れか其父たるもの母たるもの、姉なる人には美麗なる友禪の小袖を、金剛石の指環を與へ、妹には泥土にまみれたる汚穢なる襤褸を與ふることを得る乎、姉には美衣を與ふべくば、妹にも美衣を與ふべし、姉に美食を與ふべくば、妹にも美食を與ふべし、何となれば之れ同じく姉妹なれば也、同じく我が女なり、豈に彼に厚うして之れに薄きの理あるべけんや、知る可し社會主義制度の世にありては、この父母の心を以て心とし、富豪と貴族と樂利の平等を妨げつゝある財產と權勢とを破壊せしめんことを期す、三井吳服店を縱覽しつゝある婦人諸君よ、白木屋吳服店頭に立つ婦人諸君よ、新橋の浮氣婦が一般社會の流行衣を購求したりとて羨やむこと勿れ、それは現今の如き私有財產を許せることを名譽とせる世にありてこそ尤一の誇りなれ、財產と位置と權利の不平等なる社會主義の世にありては、衣服の爲めに數百千圓を要するが如き不經濟的のものなかるべく、假りに好奇心に驅られてかゝるものを新調するも、何人も作るの自由を有する社會にありては些の誇とならざるべし、

田中光顯の妻が牛乳を以て顏面を洗ひたればとて、伊藤勇吉の女房が卅間の足駄を穿たればとて、大倉喜八郎の妻が千金を散じて衣裳を購ひたればとて、現社會にありてこそ仰々しくもてはやされ、社會主義の世にありては遂に一種の物笑ひとして、巢鴨瘋癲院に送られずんば幸也、

思ふに教科書事件の如き、忠君愛國的職業に從事せる道徳堅固の教育家先生が收賄せざるべからざりしものは何ぞや、妻君内助の勢ありて、夫君縲紲の辱を受けしものは何ぞや、

道中の消息を說明するの語あり、曰はく一匹の友禪縮緬は一個の菓子箱にまさると、然りこの犯罪や夫君多く與かるところにあらず、たゞ妻なる人の、黃金の指環欲し、友禪の小袖欲しと云ふ無邪氣なる心の夫をして知らず〳〵法律の土俵際まで進入せしものにあらずや、追々は賢母に昇進せらるべき良妻諸君（高等官八等以上の辭令を有てる男子に嫁ぐ時は必ず良妻となり、子を産む時は必ず賢母となる）の虛榮心が遂に夫君をして泥棒遊戲監獄遊戲に耽らしむるに至りしにあらずや、其他公職にあるものゝ、詐欺、賄賂官金、公金の私消、官印盜用等の罪惡を犯すは「妻思ひ」てふ優しき心が其の動機たらざるは稀なり、

余はショッペンハウエルが女子を痛罵して、『卑しき小智慧にのみ依頼して、他人の店頭のものを掠めんばかり物欲しき』と叫びし語も、今日の女子に下すべく頗る適當なるを覺ゆる也、

嗚呼黃金の如き誘惑物をして存在せしむるは、なほ猫の前に魚肉を投じ與ふるに均し、希くば物々交換を禁じ、その媒介者たる黃金を無きものたらしめよ、其處に圓なく、兩なく、弗なく、磅なく、法なく、ループルなく、將師の樂籤の如く汽車の切符の如き効用に止めしめよ、人は勞働によりて其の切符を賦與せられ、其の切符によりて充分なる分配を享取せんか、人は全心全力をつくして公的方面に猛進すべし、今日新聞紙に現はるゝ「母子七人の餓死」「二銭五厘で四年の懲役」「妻子を殺絞して自殺す」「盲女の赤子殺し」「共同便所の行倒れ」「母子五人の縊死」などいふ慘劇は求むれども見るべからず、金貨銀貨相觸るゝ音を美妙なる音樂の如く感ずる賤卑なる人生觀は、全く拭ひさらるゝに至らん、嗚ナザレのエスをして慚愧せしめし「しみ食い」「さびくさる」金錢をして世界外に放逐せしめよ、されは其のときや、今日の所謂貞婦孝女といふものゝ無きに至るべし、人は孤々の聲を擧げしときより、三寸の呼吸絶ゆるときまで——赤子の產衣より、死にて石塔の中に入るまで、養育も、教育も、職業も、病氣も、災難も、旅行も、交際も、娛樂も、凡て社會之れを保證すべく約束されて、また家貧うして父母や夫の病を醫する能はざるが爲め、其の女をして其の妻をして、孝女貞婦の美名に藉つて、盗を行ひ淫を鬻ぐが如きことは決して有るべからざる也、而して其處に溺れたる赤燃死の槃治盜ならんや、劍を佩びて眠らず門を守る番いかめしき獄吏あらんや、使徒ポーロは云へり、「後にあるものを忘れて前にあるものを望む」と、人生の進德遂に進まざるべからず、「こみ合ひますから懷中物御用心」と、電車の車掌をして叫ばしむる社會は、惡しき社會ならずや、來れ社會主義よ、人を見たら盗賊と思へてふ極惡なる諺をして、人を見たら同胞と思へてふ至優至美なる言語に代らしめよ

●社會主義と海老名君

堺利彦

社會主義と基督教との關係、及び海老名彈正君と社會主義との關係に就ては、「直言」第廿三號『日本の新聞』欄に於て一言せられ、猶は同號に於て之に關する石川君の一文あり、然るに新刊の「向上主義」を見るに、『社會主義と基督教』と題せる海老名君の一文ありて、其の言ふ所、甚だ石川君の聞く所と異なるものあり、其の文體用語等より察するも、やゝ疑ふべき點なきに非ず、依て石川君は、此の一文の果して海老名君の手に成りしやを問合せたれども、海老名君神戸に旅行して未だ返事に接せず、いづれ近日歸京の上は、石川君又自然、文を草するの必要を見るべしと雖も、今は姑く「向上主義」所載の一文に對し、予の見る所を陳せんと欲す。

△海老名君曰く、社會主義と基督教との關係に論ずる[illegible]、一は政治上の自由民權論と基督教との關係[illegible]、同[illegible]、而[illegible]

△海老名君又曰く、[illegible]人類の人[illegible]に[illegible]任務に宗教なり人格の改良に[illegible]、古代[illegible]其第一義は人格に在り、[illegible]、個人[illegible]せり、[illegible]

吾人は實に國家社會の組織[illegible]然れども吾人の目的は[illegible]人格の改良に在り。古代國家は實に個人を[illegible]り、基督は之に對して實に個人の人格を發揮したるなるべし、然れども羅馬の亡びたるは基督の爲に非ず、唯た大奴隷制の崩壞したるのみ。封建制度之に代りて起りたるも、多數の農奴は犧牲となれること正に古代國家と相同じきに非ずや。農奴制亡びて現代の資本家制度起りたるも、多數の勞働者は犧牲となれるは前代と相同じきに非ずや、個の商品として用ゐられ、機械の附屬として過ぎる、今日の勞働者即ち賃銀奴隷に、抑何の人格ありとするぞ、基督教の諸子之に對して汝らに其の人格を説くと雖、畢竟何の効あらんや、諸子若し彼等に尊重すべき人格ありとせば、何ぞ先づ之に衣食を與ふる事を要求せざる、誠に衣食せらるべき人格にして、衣食の自由すら與へられざるの理あらんや、[illegible]の自由すら與へられずんば、如何ぞ[illegible]く精神の自由あらんや、[illegible]實に此の貨幣奴隷の境遇[illegible]の自由」に依りて、個人の人格を高めんと欲するものなり。

△海老名君又曰く、社會主義[illegible]行すべく、[illegible]

△則ち富者其財を割いて貧者に[illegible]

噫何ぞ其の言の[illegible]せるや。「富者其の財を割いて貧者に[illegible]する「慈善」[illegible]は「階級思想」に在り、「奴[illegible]在り。亦何の「相互扶助」かあらんや。亦何の「個人の人格」かあらん。

[illegible]なる言

噫何ぞ其の言の愈よ出でゝ愈よ愚なるや、是れ實に左の意味を有するものにして、亦何の「個人の人格」あらんや。日はく、汝等貧民、富者に服從せよ、是れ天理の自然也、[illegible]ひ、卑かに其の慈善を要求すべし、汝等[illegible]しく感謝して之を受くべし。

斯くの如く見來れば、吾人は[illegible]を以て海老名君の眞意なりと信ずるを得ず。然れども「向上主義」に其の聞かに「海老名彈正」と署せり。故に一言すること斯くの如し。

▲▲▲又發賣禁止▲▲▲

山口孤劍氏の[illegible]八日[illegible]、[illegible]

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

樂天の眞意義

石川生

（一）樂天と厭世

樂天と、厭世に對したる言葉でありますが、或る人は、此の世の中は與に美しく、樂しいものだといひ、或る人は、イヤ此の世の中は實に汚れた、厭ふべき所だといふ。ソコで厭世主義とか又は樂天主義とかいふ様な言葉が出來てきました。

元來一つの天地であるのに、何故に斯く異りたる見所が出て來たのでしやうか。思ふに此の世の中に二箇の方面がある爲めでしやう。即ち、一方より見れば、我と社會と自然界とが調和し行くの點があり、他方より見れば、調和せずに却て衝突する所が多いからでしやう。

（二）厭世觀

腹が減つて飯が食ひたいと思ふても米が無い。冬になつて寒くて堪らないと思ふても着物が無い。幾ら苦しいとて他人の所有物を持つて來れば盗人で、世の中から惡徒と見做される。自己獨りは其の苦を堪へるとしても、親や妻子の其れを忍ばれない。假令又た我が一族に其苦が無いとしても、多くの同胞が其苦難に泣きつゝあるを見る時は、苟くも一片の人情あるものに忍ばれない。そして社會の他の一面に、巨多の富財が積み重ねられて在るのを見るも如何ともすることが出來ない時には、誰でも此の世の中が厭になつて來るでしやう。是れ即ち我が肉慾、若くば我が同情心と、社會との衝突なのであります。

（三）宗教家の樂天觀

斯の様な惡社會に居て、ドウして徒らに樂天など澄まして居られましやう。併しながら此の衝突を取り除く手段が明示せられざる限りは、其の厭世觀は決して取り去られるものではありません。此んな社會に在りて、人は從順ならざる可らず、人は其の分に安んずべきものなり、など言ふ宗教家の常套語は何等の權威をも持ちません。

此の様な宗教家の樂天觀といふものは、又た當になりません。此の様な社會に居りて徒らに天を樂むなど言ふのは、臭いものに蓋をして、臭いものが無い様に思ふのと同じであります。眞に徹底したる樂天觀ではありません。故に此の考には全く生命が無いのであります。

（四）樂天觀の最利

然らば此の人間の世界は、結局、闇から闇に、悲觀から悲觀に墜つて行くべきものでありませうか、此には種々議論もありませうが、六かしい研究は別にして、私は決してソンナものでは無いと思ひます。此の議論は性の善惡論などにも關係して來るのですが、私の考へでは、人は社會的の動物なりとか、性に率ふ之を道と謂ふとか、此等先哲の語に眞理があつて、人の本性は其の周圍と調和せんことに向つて發展するものであらうと思ひます。否な、人の天性を圓滿に擴充して行けば決して周圍と衝突すべきものでは無い筈なのです。若しそうで無ければ道德とか、宗教とかいふものは其の根底を失ふのであります。否な、宗教とか、道德とかいふものは決して起らなかつたであらうと思ひます。

兎に角、吾々の人生觀に於いて、此所に一點の光明は放たれるのです。樂天觀の最初の眼が開かれるのです。然しながら是れだけでは、まだ光明が甚だ幽かなのです。其光りを我が命とするには猶ほ一歩を進まねばなりません。即ち今の世はドウして人の天性を圓滿に擴充して行くことが出來ぬか、如何にせば個人と社會とが調和し得るかと、いふことを明かに究めねばならんのです。

然るに、世の宗教家は、不義とか不德とかいふことを、個人と社會との衝突である[illegible]に、人の心の迷妄より來るもので、外界の改革をしたとて何の効果もないと言ふ、心の迷妄とは如何なることを意味するか知らぬど、私の考へでは、人の天性を擴充するに[illegible]

其れに不義とか、不德とかいふ名が付けられる樣になるのは、畢竟、個人の慾求と社會の慾求とが衝突するからなので、此の衝突が我が心裏にも反映して一の悲觀が起るのです。そして又た其が悲觀となるのです。

故に吾々の考へでは、此の喰ふことも、衣食に乏しい同胞を[illegible]圓滿に擴充したいと思ふ心を、圓滿に擴充したいと思ふのであります。それにはドウしても是等の問題より生ずる個人と社會との衝突を消滅せしむる方法を案出せねばならんのです。乃ち此に社會主義といふものが案出されました。又た其の手本とも言ふべきは、古く基督の使徒遺い中にもあります。即ち使徒行傳の中に「信者は心を一にし、意を一にして誰一人その所有を己が物と云ふことなく、凡て之を共に有り、……其中に一人も乏しき者なかりき、蓋は地所あるひは家を有る者は其を售し所の價を持來り、使徒等の足下に置く、これを各々の用に從ひて分與へしが故なり」とあり、全く共産主義の理想を實行したのと同じであります。

（五）結論

顧みるに今まで述べて實際社會を見ると如何でしやう、實に四面暗黑として悲慘の聲に充されて居るのです。是に於てか吾々は、吾々の理想を實行すべく現在の惡社會と戰はねばならんのです。此の戰いを續けて行く間に、吾等は一歩づゝ理想に近きつゝあるといふ自覺があるばかりで、初めて其所に光明を握るが出來るのです。初めて眞の樂天的生命に入ることが出來るのです。換言すれば、今の世に於ては樂天主義の生命は實に社會主義的奮鬪の中にあると思ひます。

下谷區萬年町 貧民窟の狀態（四）

齋藤兼次郎

[illegible]彼等が拾ひ集めし物を問屋に取引する[illegible]の手段であらうか、[illegible]の爲に調査せし結果を[illegible]先づ屑物[illegible]買目[illegible]錢、紙屑一貫目[illegible]錢、硝子壜[illegible]貫目七錢、竹皮一貫目六錢、古[illegible]錢[illegible]古手紙一本二厘と謂ふが相場である。終日竹籠を負ひ、手に竹箸を持ち、終日盛に眼で稼ぎ廻りて、其所得に積もつて[illegible]貫目、竹の皮などは十日も十五日も經ざれば一貫目に滿らず、硝子も其通り、古[illegible]ンド一つ手紙は[illegible]に有りません、それで大人一人の命を支へなければなら[illegible]、故に彼等の收入は日に七八錢か十錢に過ぎず、[illegible]一段收入が少ないの[illegible]、最も之に[illegible]通り、[illegible]是は五六十錢より一圓位の資本を持ち、籠車又は[illegible]など呼び歩るくのである、多くは子供が背負ふた[illegible]婦人にて、晴天の時は二十錢位の收入がある、今一種は六七十歳位の老婆人が破れた籠を提げて五六錢の元手にて前の樣に呼び歩くので、一日の得る所は[illegible]と四五錢なり、其内より家賃と蒲團の損料に二錢五厘を差引かれ、其餘す所の二錢か二錢五厘で露命を繼ぎ居るのです

八、次は下駄の齒入、斯の職業は下谷の貧民窟には大分ありますが、近頃大工または箱屋の老練者より斯業に歸するのと、電車の爲め車夫が不景氣なるより斯業に歸するのとが多くあります、さてコンな仕事にも初めに五十錢位は掛ります、それで一切の道具に四ヵ月位、元仕入に五錢なりを得るまでには相當に得意も出來、頗る知らなければならぬ由、其れに、仕事の仕方も[illegible]の事で、仕事のサキてが少ないので一箇困難して居るとの事で[illegible]、[illegible]は少し細いに收入の事を申しましやう、日向下駄一足に齒を入れて六錢、元料が二錢五厘、日向下駄ブナ齒が四錢、同じブナ齒六錢、元料一錢、高下駄[illegible]齒が十錢、元料四錢、同じブナ齒六錢、元料一錢[illegible]、[illegible]日々の所得に二三十錢、貧民の部落では上等の收入の部類です

△以上數回に亘りて述べた所は、余が最近に取調べた所で、素より杜撰なるものである、併し乍ら極も角も斯の如き悲慘なる境遇に呻吟するものが至る所に多數あることは事實です、而して又た是等のものが皆な世の生存競爭に失敗したものなる事も明かです、即ち此等の憐れむべき人々は、吾々一般の同胞が醉め〳〵て此の飲にまで追ひ遣つたのでありますへ四海同胞とは古い昔からの敎へであるのに、ナゼ斯んな憐れな人々を直ぐ隣家に居るのを見て打棄てゝ置くのでしやう、それで文明だの、開化だの、敎育が進んだの、人智が增したのと、何と馬鹿げた世の中でしやう、四海の人が皆な同胞なら、相互に助け合ふて、共に樂しく此の世を送るのが當然ではあるまいか、而も單に助け合にはお位ならでダよいが、お互に隣を何で突き倒さうといふ樣な世の中で、貧民は日に月に益々多くなつて行く有樣、荀も一片の眞心ある人が、ドウして之を默過することが出來ましやう、而して社會主義運動は即ち此の社會の大欠陥を治めやうといふ所から起つたものでありまず、世の[illegible]な事を言ふて居る、學者や宗教家などには、少しく此の貧民社會を見せてやりたいものです（完）

東西南北より

▲[illegible]の[illegible]　[illegible]

▲炎天に冬服　[illegible]炎天に於て市街鐵道會社の[illegible]の旗振りが、未だ會社より夏服の[illegible]見え、冬服を着て此炎熱[illegible]て、其職を忠實に[illegible]に彼等に同情を表さゞるを得ざるなり、會社の不法を憤らざるを得ざるなり[illegible]炎天に勞働しつゝある間に、會社の[illegible]何を爲しつゝありや、彼等[illegible]ルの涼風を[illegible]て、其の[illegible]沒りつゝあるに非ずや（一學生）

▲日本第一金宗の本山　日本第一金宗の本山たるこの大阪、煤煙の巷たるこの大阪、[illegible]るこの大阪、第四師團の[illegible]俗惡輕浮なる所謂大阪商人[illegible]のあつまり、其の[illegible]優性[illegible]輕い[illegible]のには、之れなき[illegible]らんと存じ候（小野生）

▲十年目の歸郷　十年目に[illegible]した、ハンケチの[illegible]背つぶれて[illegible]生活の苦しさ[illegible]町の戸數が減り[illegible]は皆[illegible]ました[illegible]ぎた（匿名細[illegible]）

▲傑い處女作　[illegible]けなければ、さて消えゆくと[illegible]も、聖經文學が起りました。[illegible]其一つです、集中[illegible]我を知らんと欲せば先づ[illegible]己が姿を見るべし、一切平等[illegible]と何の選ぶ所かあらむや（門外漢[illegible]）

▲眞理の種　鹿兒島平民俱樂部第二回の會合には、種々なる障害にて僅かに[illegible]名に過ぎず、[illegible]されど、最も快と覺えし[illegible]は、四[illegible]の[illegible]小學校の先生に[illegible]にして益々深く[illegible]（古[illegible]生）

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

●貧窮問答の歌を讀む

（荒村遺稿より轉載）

貧窮問答の歌、萬葉集中の雄篇にして、作者は即ち山上憶良卿なり（中略）

△貧窮問答の歌

風交り雨降る夜の　雨交り雪降る夜は
爲べもなく寒くしあれば　堅鹽を取り啜しろひ
糟湯酒うちすゝろひて　咳ぶかひ鼻びしびしに
しかとあらぬ鬚かき撫て　我をおきて人はあらじと
誇ろへど寒くしあれば　麻衾引かゞふり
布肩衣ありのことごと　着そへども寒き夜すらを
我よりも貧しき人の　父母は飢え寒からむ
妻子どもは乞ひて泣くらむ　此時はいかにしつゝか
汝が世は渡る
天地は廣しといへど　あが爲は狹やなりぬる
日月は明しといへど　あが爲はてりやたまはぬ
人皆か我のみやしかる　わくらはに人とはあるを
人並に我もなれるを　わたらなき布かたぎぬの
海松のごとわゝけさがれる　かゝふのみ肩に打かけ
伏廬の曲廬の內に　直土にわらときしきて
父母は枕の方に　妻子どもは足の方に
圍み居て憂ひさまよひ　竈には烟ふきたてず
甑には蜘蛛の巢かきて　飯かしぐ事も忘れて
鵺鳥の呻吟ひなるに　いとのきて短き物を
端截ると云へるが如く　笞とる里長がこゑは
寢屋戸まで來立よばひぬ　斯ばかり術なきものか
世の中のみち
世の中をうしとやさしと思へども　飛び立ちかねつ鳥にしあらねば

希くば大に自覺するところあれ、かくの如く、山上憶良がかゝる實情を敍し來る所以の、如何にも切實にして緻密なるを味ひ盡くして、徐ろに其面影を呼び出し來れば、古代に於ける沈痛眞面目なる一個吾黨の大詩人を思ひ寄するのやむなきに至らむ、思ひ見よ彼は地方の一官吏なり、其今日の習に推せば、阿諛辯佞、日夜に夫れを事として只管其食祿に放れん事を恐れ、かの渡良瀬の窮迫も調査に事を左右するが如く、民情も風敎も決して彼等の顧るところにあらざる如くなれど、憶良が高潔なる道念は、一切の恐れと一切の迫害を四邊に踏破し、以て其天職を全ふせんとし、さては身の官稱にあるをも知らざる如く、此彌勒の悲歌を編んで、特に終りに『山上憶良頓首』と記入しあるを見れば、これ其あまりに窮迫の樣なるを憐み、且は俗吏の横暴を憤して時の大宰の長官か、或は深く九重の奧に奉れるものたるや、疑を容れず、之を現代の小役人等が、社會の事情を密閉して、聖上の眼をおほいまつらむとし、警官まで又は社會主義思想の傳播を恐れ、警官までも騷ぎ廻るの醜態寧ろ滑稽なるに比して其意氣の盛んなる、其良民を撫育せる心情、二つながら雲泥の差あるは論をまたず、實に我文學史上、而かも多く似て非なる詩人の中に、この大篇を紹介するを得るは、吾人の大に以て誇りとなすところ、希くば今日宮中に出入する御歌所諸大人たるもの、徒らに聖上をして月と花とに、歌はしめ奉らず、其奉講の時に於て、御都合をのみ謀らずして、日本古代に於ける詩歌精神の神髓なるものを獻せよ、然らば此抹殺す可らざる、萬葉集の雄篇を如何にして、講じ奉らんとするか、頑迷の徒よ、阿諛の黨よ、汝の知らざるうちに、汝等の育たざるうちに、汝の祖先は吾人と同樣の聲をふるひあげて、大に汝等の沒道を彈劾しつゝありけるを、今又讒れよ寄ては渡良瀬の哀歌を禁じ、今又吾人を厭せんとする者よ、爾等果して、故人憶良が骸を刑して、萬葉集中此歌を取除くの英斷を敢て仕得るか、愚也愚也。

●嗚呼娼妓

荒畑生

（第壹）人身賣買

人身賣買は我國の法律に依りて、嚴に禁ぜられつゝあるなりと雖、事實は決して然らず、見よ、帝都の眞ん中に於て、日本國の到る處に於て、幾多の同胞は物品と等しく價を附せられて賣買せられ、人類最大の侮辱を被むりつゝあるに非ずや、呼々我には綺羅を裝ほひ紅白を施して彼には獸類だも尚は能くせざる醜業を營む、人よ暫らく彼等に對する厭惡の念を去て其の心事を觀ひ見よ、誰れか嘻然として淚を呑まざる者ぞ、彼等と雖ども甞つては純潔なる處女の時代もありしなり、耶の情れなきに泣き、戀の樂しさに笑みたる事もありしならむ、然れ共一朝、親の家產を破り若しくは生計の困厄に會はむか、所謂孝行てふ美名の下に賤劣的道德の下に生きたる美くしき小女は玆に一個の物品と化し、多きは百金、少きは數十金にて冷酷牢獄よりも辛らき妓樓に賣り渡さるゝ也、甚だしきに至りては、其の年期の五年六年の永きに亘りて、其の金の僅かに十數圓なるを聞けり、謂ふ勿れ文明と、謂ふ勿れ正義人道と、人類は市に賣買せられ、陋劣醜惡なる野獸の慾に心狂ぜる男子は可憐花の如き姉妹を犯しつゝあり、嗚呼斯くて尚は文明とや、嗚呼日本人に正義人道を云々するの權利ある乎、呼々正義と人道と而して賣淫と、光榮なる哉、日東の君子國よ、

（第貳）血と淚の結晶

華麗、人の眼を奪ふ裝ほひして、店頭に陳ぜる娼妓を見よ、いたましき哉其の姿の美くしき、いたましき哉其の心の飾はり多き、彼等が給金(?)は一人の客に就て幾錢てふ僅少の金を得るの定めにして、彼等は實に此の金に依りて或は着、或は喰はざるべからざる也、而して又、四季折々の衣服を新調する事は彼等の最も苦心する處にして其の所謂よき客を有する者は或は此の心配なくして可ならむも、多くの娼妓は此際自己の力にて工面なし得ざるものから、止むなく樓主に借金する也、而して其の借金は乃ち年期となりて更に幾月かは年期證文の中に加へらるゝ也、衣は斯くの如し食は乃ち奈何、吾人豈に多く語るに忍びむや、監獄の囚人と雖ども斯くの如き事はあらじ、彼等娼妓は實に一日二食なる也、二食は尚可なり、殘虐冷酷なる樓主の娼妓に給するは單に飯のみにして、惡しなる娼妓は皆な自ら食事毎にナケナシの金を以て、魚を買ひ野菜を買ふと云ふに至ては抑も此れを何とか云はむや、余は田舍の小娘が、往往娼妓の美服に惑はされて、ウカと遊廓に陷まり込む者なるを聞けり、然れ共彼等も體ては、其の衣、其の食、悉く血と淚の結晶物なるを知るに及び、初めて其の夢を醒まして悔悛の淚にくるゝも已に遲く、而して遂に到底救ふべからざる谷底に陷る也

（第參）底無き穴の如し

憐れなる姉妹が其の家の爲めに妓樓に賣らるゝや、英靈なる一個の人間は、一片の年期證文の爲めに精神も肉體も束縛せられ了んぬる也、人は思ふべし、約束せし年期を無事に勤め上げ了ほれたる金を悉く辨び遂くさば自由なるを得むと、然れ共見よ、彼等の前借は幾年かを無事に勤めとげたる揚句に於て、却て三十圓の金は五十となり五十の金は百となり居るに非ずや、此れ皆な彼の樓主等が狡猾なる新手段にして、彼等娼妓は斯くの如くにして何時迄も苦界より身を脫くる能はざる也、之れを聞く、彼の樓主等は一時に安く反物、日用品、小間物類等を買ひ入れ置き、而して娼妓をして他の商店の物品を購はしめず、否應なしに自家に蓄へある物品を驚くべき高價を以て賣り附くるなりと、斯くの如くにして彼等の借金は益々嵩み其の結果は三年なりし年期は知らざる間に五年となり、十年となりて永く永く延び行くなり、遊廓は尚は底無き穴の如し、一たび之に陷ればまた出る能はざる也、

嗚呼悲れむべきは彼等が最後に非ずや、年も老い行き色も衰へ果てゝ、惡しき疾などの身に出でもせば情け冷めたき樓主に捨てられ、頼るべき人もなく、行くべき處もなく、空しく路傍に打ち倒れて果敢なくなり終る也、余は甞つて橫濱の遊廓に於て某樓の娼妓の今は年老い色も衰へあまつさへ惡疾身に纏り出でゝ、冷酷なる樓主に捨てられ、行くべき方、頼るべき人もなくて、甞つては已が全盛を誇りし其地に惡しなる姿して物乞ひつゝあるを見たりき、呼々一人の樓主が可憐なる姉妹を虐げて家に巨萬の富を貯へ、市會議員となり縣會議員となれる時、多くの娼妓は乞食となり、行路病者となり、身投女となり了る也、誰れか之を思ひて悲憤の淚に咽ばざる者あらむや、

（第四）社會主義ある耳

讀者諸君、諸君の足一たび遊廓に向へるならば、恰しも動物園にでも行ける乎の感あるべし、厚く高き塀は四圍を圍みて、蟻の這ひ出る隙もなき程に嚴重なるも、此れ要するに娼妓の逃走を防がむ爲め耳、余は曾つて橫濱の遊廓に於て、二階より飛び降りて自由廢業を遂げたる者あるを聞けり、苛酷なる樓主の取扱に堪へかねて逃走を企て、中途にして捉へられ折打絕食あらゆる虐待を受けし者あるを聞けり、

嗚呼慈善の菩薩が天降り居ませる遊廓とは實に斯くの如き無警察無政府の別世界、否な焦熱阿鼻の大地獄なるを知らずや、謂ふ勿れ、彼の自由廢業によりて無智の娼妓等は慰安と光明とを得たりと、社會は彼の醜業を離れたる婦人に向つて正業を與ふる途なくして、未だ殘酷無情なりや、況むや今迄眞面目なる生活をなしつゝありし子女の生活難の爲めに續々娼妓となりて其後を埋むるあるをや、

嗚呼斯の自由廢業案が出で來る共、社會より貧富の懸隔を除かれざる間は娼妓は到底絕滅せざる也、然り、娼妓を社會より除かむと欲せば之を社會主義の實行に俟たざるべからざる也、

●『社會主義と婦人』の序

孤劍君の文は赤熱の鐵を打つに似たり、鐵槌の全力を籠め來つて其の大鎚を落下すれば、火花急霰の如く迸つて八方に散亂す。其の議論は直截にして痛切なり、其の字句は熱烈にして悲壯なり。其の人其の文の如き也。

君今や社會主義を說かんと欲して其の題目を婦人に取る。べーベル氏曰く、婦人は奴隸の存在以前に於て既に奴隸なりきと。此の悲慘の運命を有する婦人を主題として社會主義を說く、是れ豈に實に其の法を得たるものに非ずや。況んや君の文章は最も善く婦人の爲に泣き、婦人の爲に憤る文字にして、婦人の爲に叫ぶに適せるをや。詞は所謂る婦人の害あるもの也。

余は此の事を喜び、又此の書が甚だ多く社會主義傳播の爲めに貢獻する所あるべきを信じて疑はざるものなり。

堺利彥

大鹽先生を懷ふの歌

大阪にて　孤劍生

淀の流れの變はる
茂き野末に火の消えし
沈む夕陽の仰ぎみて
金剛獅子の
巨人よ君が偲ばるゝかな

休むことなき噴火山
胸の波はたちさわぐ
天馬ともむる胸なれば
誰れ鐵鎖の繫とりて
君が感情をうたふべき

晦の力の迹として
淚潮の何はかはりたれ
黃金の光するどきに
點に渦まく瓜哇をて
いま文明の鬼と化ふ

熾烈なる火に燃えし
鐵輪ひゞき鳴るところ
白き刃にあらなくに
碎けに換へて肉彈を
死の手にわたす彼らが

「自由」と叫ぶこゝとして
「光」は「闇」に逆服りしを
天を仰ぎて血に泣く
弱者を見ては泣くの
枯骨に聲のなからんや

我が氣は猶り燃えて
三たび河水を遡りて
暴富の胸の窮みに
熱き涙に流れてぞ
革命の波押しわけん

△故松岡荒村一周忌　本日は正に是れ松岡荒村の一周忌也、上段に掲ぐる所は即ち彼れの遺稿也、荒村遺稿中の一文と共に以て同志追懷の料に供す。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

同志の運動

▲社會主義茶話會 (神田)

豫告の如く、去る十六日午後七時より、神田三崎町吉田屋に於て開會、會するもの約四十名、△先づ予は開會の挨拶として、本會が傳道の目的を以て開かれたること、來會者諸君の談話は成るべく事實の報告、實驗上の感想を述べられたきこと、及び本會をしても互ひ修養の爲すの手段にも致し度きことなどを述べ、△齋藤兼次郎氏は下谷萬年町、四谷鮫ヶ橋、麻布[illegible]等の貧民の實狀を述べて社會主義の必要に及び、△山田金一郎氏は社會主義と宗教との關係に就き、常に深編笠を被り、地にのみ俯むきて、天上に光る星の閃めくをも知らざるに似たる淺薄なる唯物論と、一心に空の月のみを望んで己が足の[illegible]んとするに類似せる如き宗教論とは、共に吾人の取らざる所、[illegible]は宜しく大木の[illegible]によりて、深く深く此の地上を耕さざる可らずと陳ぶ、是にて豫定の談話は終へ、茶菓を喫しながら、來會員の[illegible]に移りぬ、[illegible]事なれば謹に一々記すこと能はず、例へば深川の櫻井某と稱する大家主の稼業を報じて、彼の階級には[illegible]も[illegible]の實勢も[illegible]、[illegible]貧民より[illegible]取らんとするあるのみと評し、或は自己の[illegible]といひて[illegible]に徒したりといふを聞き、[illegible]問題[illegible]、又た從つて社會主義に[illegible]と述べ、[illegible]は某工場に勤むる女工が工場主任の[illegible]に流れ[illegible]居ること[illegible]に於ける[illegible]の悲慘なる狀を述ぶる[illegible]、殊に齒科醫業君の話は一同に[illegible]たる如く見えたりき、某者には[illegible]の實驗、先づ貧しき階級の人を得意にしたいと思ひ[illegible]丁度來たのが貧乏人でありました、[illegible]ゲ療治をして遣りましたが、只といふては再び來にくいだろうと思ふて五錢の施術料を取りました、すると二三日の中に六七人の患者が一時に來ました、皆始めの人の評判によつて來たのです、ドウしてソンナに一度に來たかと思ふて聞いて見ると、御承知の如く齒醫者は非常に金が食りますので、仲々貧民には治療が出來ない、已を得ず病人を其儘に棄てゝ置いたのが、今安いと聞いて急に詰んでヤツて來た訳なのです、齒醫者が用ふる、神經を殺す藥もありますが、其の一瓶の値が四十錢で、四十錢の藥が十年も用ひらるのです、故に幾ら安くしても損は無いのに今日の社會では其安い藥を用ひることが出來ないで難病を[illegible]置くのです、然し私も患者が金持だと其から隨分高く取ります、金齒の一つも入れると其れで一ヶ月の家計を立てるに餘りある料取ります、そして其割合に成るべく貧民に安くするのです」と、△次でワイト一輝苑を分ち、餘興に入るの前、樋口傳君立ち、本期改會に於て木下君が中止を受けたる時、壇上に立てるは僕にして、之が爲に海老名氏に於る其の輕忽なる攻撃せられたれど、海老名氏とて決してさ程立派なる人物に非す、前の直言に掲載したる石川君の紹介は少しく間違ひ居らざるやと述べ、予は樋口君に對する答として之に答へ、彼の文章は日本の基督教徒に與へたるものなると、基督教徒の先覺たる海老名氏がアレ丈けに進んだ考へで社會主義に接したとは、日本の基督教徒に對して慶賀すべき事實と思ひたるが故なる事、若し餘りに讚め過ぎたるが不可なりと爲さば予は其責を負ふべき事等を陳べたり、△餘興は例の櫻井君の手踊り、原霞外君の講談のみにて散會せしは十一時頃、近來に無くシンミリとした、愉快な會合なりき、但し神田署より警部巡査が裏の座敷に隱れ居て、餘所ながら臨傍せられしは如何にも間のヌケたる感ありき(石川生)

▲東北傳道行商日記 (七) 荒畑 勝三
(栃木縣佐野町より)

▲七月十日、晴午後一時平民社を出で、再び傳道行商の途に上つた、轆からぬ車を曳いて居る上に日光は上から用捨なく照り付けるので汗が上服まで染み出るのである、併し此の夕方、草加の木賃宿に泊つて畑に面した室で、稻や唐もろこしや茄子や胡瓜を吹いて來た冷風に汗を乾した時は實に愉快であつた、▲十一日、晴、暑を冒して埼玉縣大相模村別府に至り讀者飯島氏を訪ひ氏の家に厄介になることゝした、此夜某旅館の二階を借りて演説會を開いたが時辨が各戸に注意したので一人の聽衆も得られなかつた、此處では未だ機鋒を取て居るから驚くアヤないか、▲十二日、曇、四方十土地の名々に讀者石[illegible]氏を訪ふた、氏は青年農夫で熱心なる主義者である、此夜大澤町に宿る、今日からまた逆食がつき初めた、▲十三日、晴、今日は大澤から宗岡さして歩るいた、夕方途中の田舍家などで親子揃ふて樂に耐して浴みした體を夕風に吹かして居るのなどを見ると羨ましい程平和である、栗橋の町は祭りで笛の音や太鼓の音や甲々賑かであるが僕には非常に寂びしく感ぜられた、▲十四日、晴、ヶ橋を發し古河を過ぎて栃木縣谷中村に入つた、田中正造翁にも面會し村民の案内で堤防や田畑などを見た、呼々忘られたる谷中村よ儞に實に田中翁と同じく此の可憐なる村民を永く開水食めにした奴原を火食めにしてやられば承知出來ぬ、此夜村内の某氏の家に厄介になつた、▲十五日、晴、畑の方で『此の村泥棒メ』と大絶叫をなす者があるので驅け付けると其れは谷中村買收の調査に來た縣廳の吏員や警官を田中翁が追はしつゝあるのであつた、呼々此れ野に呼べる人の聲に非ずや、午後から貧民の狀態など見た、谷中村は資本家制度の犧牲を最もよく現はした好模型である、▲十六日、曇、朝谷中村を辭し此の暑い日に僕にクツ付いて歩るく巡査諸君は實に氣の毒だ、佐野町に着し同胞會の近藤氏等に會し夜は同氏の家で談話會を開いた、▲此の一週日に於て十圓の社會主義書類を賣つた。

昨夜栃木町警察署より栃木縣下に於て社會主義的書類を販賣し又は何樣のものを配付するを絶對に禁ぜられ不得止今朝は群馬縣か埼玉縣へでも出發せむかと考へて居ます。

▲室蘭平民倶樂部 (第三次例會)

七月八日午後八時、室蘭町札幌通り一番地に開會す、來會者例の如く三名、司會者先づ會務傳導其他諸般の報告をなし、次いで中谷、田原、松岡の三氏各所感を陳べ、後、主義傳導に關して雜談し、十時散會せり、次回は七月十七日の同所に開會(野人)

▲鹿兒島平民倶樂部 (第二次小集)

去る一日午後六時より、例の如く研究會を開きたり、來會者四名なりき、是れ學生諸君の夏期休暇にて歸省されたると、他の會員諸君の種々なる差支に依り來會せられざりしに依り、今回は少數なりき、今回は研究問題を出さずして只だ主義に關する雜談をなし、九時散會せり、次回は八月五日(第一土曜)に開會(KF生)

▲札幌區及び附近の同志諸君へ

同志の懇話會を催したいです、若し同意ならば御一報願ひます(札幌區北一、西三、三、大時計前瀧川勇吉)

▲廣島縣人に告ぐ

百五十萬と稱する我縣下に於て眞に刻下の大問題を研究する者果して幾人かある、刮目せよ、社會の禍毒は増々我地方に襲來り、生存競爭は日に月に激烈を加へんとす、是れ志ある者の看過すべきの秋ならんや、然れども未だ嘗て經世の解決を試れ、人類に向ひ醫方を與へんとする者あるを聞かず、嗚呼人生は遂に悲慘の歷史を待て終るべき乎否や、我等茲に縣下同志の贊同を得て同志會を起し相互の研鑽に資せんとせり、今哉幸ひ時機は至れり、即ち一堂に會せん事を約す、志ある者願くば鉅席の榮を賜へ、▲所廣島市(會場未定)▲時八月六日(第一日曜日)▲御贊成の諸君は廣島市段原村字谷 早川次郎君宛にて御一報相成たし。(柏生)

新刊紹介

▲懺悔録(近角常觀氏著) 『私は久しき間自分が煩悶したことを言ふのを避けて居りましたが、近頃同様に苦める人々が多い樣でありますから、有體に懺悔して共に御慈悲を頂きて貰ひたいのであります、』とは著者序文中の一節なり、『一心不亂に佛に祈りて救はれんことを求めたが少しも何の感じもなく……九月になつては、……終に「ルチユー」といふ病氣になつた、此病氣は肉の下が膿むので、非常の痛みを起す難病でありました、……私が眠ると知らず識らずヒー／＼泣き叫ぶのが、……今でもそのことを思ふとゾツとすると申します、……病氣が少しく快くなつて病院を出たときは九月の十五日である、其後十七日に、初めて病院へ切り口を洗ひに行く……それから病院から歸り途に、車上から虛空を望み見た時、俄に氣が晴れて來た、これまでは心が豆粒の如く小さであつたのが、此時胸が大に開けて、白雲の間、青空の中に、吸込まれる如く思はれた』とは著者が自己の信仰の經過を談れる一節なり、鋼は著者は自己の心中全く阿闍世王の煩悶と符節を合すものありとて之を說き、又た附錄として歎異鈔を添へたり(定價二十錢 麻布飯倉森江本店)

▲新体詩第一集(田部井鐵太郎編) 年若き文學生の育誠と其作品とを集めたるものなり、彼等が淺墓なる虛榮心に投じて幾何かの金錢を儲けんとするは見下げはてたる心得かな、下らなき詩に下らなき評を添へて『今日世に咲ける花の香を、常世のまゝに匂はしめむ』など稱するは何等懸むべき狹猾の所爲ぞや (市谷田町二の卅文友社)

▲新野崎村(伊原青々園氏作) 『イトド飢に眼のある講談落語が、此の通り時勢後れの爲め廢物ばかりが多くなるのだから愈々新作が必要となるのであります、……形式の上でも、例へば講談師や落語家が高座で用ゐる語だけで言つても、今日の時勢に後れて居るためしは幾らもあります、是れから先き若い者が聞いて不思議に感ずるやうな語や語づかひは澤山あるのであります、だから、今の講談落語は既に衰微に傾いて居るので』之が改良の資に供せんとて、即ち本書はものされしなり、「新野崎村」の外に、「縁切渡」及び「元祿武士」の二編を添ふ(定價廿五錢 小石川原町六番地 晉文館)

△東洋哲學(十二の七)
△讀苑(十八の七)
△東京經濟雜誌(一二九一)
△中央農事報(六四)
△人性(一の四)
△史學界(七の六)
△婦女新聞(二七一)
△文庫(二九の三)
△學友(一の四)
△向上主義(九)
△無我の愛(二)
△十善寶窟(一八四)
△政界時事(五九)
△慶應義塾學報(九二)
△東北評論(一及び二)
△てがみ雜誌(二の四)

芝區[illegible]町 [illegible]社
京橋區左衛門町其社
芝公園全國農事會
日本橋通二丁目裳華房
本郷追分町其事務所
牛込東五軒町其社
本郷駒込西片町出版協會
名古屋白川町其社
本郷丸山福山町久友社
北豐島郡巢鴨村[illegible]
小石川關口駒井町目白僧園
麹町上二番町其社
芝三田同發行所
新潟市西堀前通一番町其社
麹町區有樂町三の一有樂社

◎木下尙江君小說

小說 良人の自白

上篇は久しく品切の處、この度第四版發行せり
中篇初版再版とも直ち品切れ今回更に三版發行せり
下編目下每日新聞に連載中、秋風吹き至るの比、出版するを得べし
(定價、各冊二十五錢、郵稅不要)

火の柱

第八版を發行し『良人の自白』と相並びて文壇を橫行す▲價同

發行所 東京市麹町區有樂町三丁目 平民社
取次所 大阪市中の島 田簑橋南詰 平民社

平民文庫出版廣告 (郵稅不要)

◎社會主義入門 平民社同人編 定價十錢
◎消費組合の話 石川旭山著 定價十二錢
◎地上の理想國 瑞西 安部磯雄著 定價十五錢
◎社會黨建設者 ラッサール 幸德秋水著 定價十五錢
◎土地國有論 西川光次郎著 定價十錢
◎富の壓制 西川光次郎著 定價十錢
◎經濟進化論 田添鐵二著 定價十五錢
◎小說 火の柱 木下尙江著 定價廿五錢
◎小說 良人の自白(上) 木下尙江著 定價廿五錢
◎小說 良人の自白(中) 木下尙江著 定價廿五錢
◎革命婦人 平民社同人譯 定價十二錢
◎社會主義と婦人 山口孤劍著 定價二十錢

五錢本之部 (一部郵稅二錢 但二冊以上郵稅不要)

◎百年後の新社會 堺 枯川抄譯
◎理想鄉 堺 枯川抄譯
◎ジヨン・バーンス 西川光次郎著

書籍取次販賣 (郵稅無料)

◎社會問題解釋法 (安部磯雄著) 價一圓二十錢
◎廿世紀之怪物 帝國主義 (幸德秋水著) 價廿五錢
◎社會主義神髓 (幸德秋水著) 品切中
◎小說 勞働問題 ([illegible]譯) 價卅五錢
◎社會主義概評 (島田三郎著) 價三十錢
◎社會黨 (西川光次郎著) 價十五錢
◎產業組合手引 ([illegible]) 價二十錢
◎青年と生存競爭 (安部磯雄著) 價二十錢
◎家庭の新風味 (堺利彥著) 價[illegible]
◎家庭夜話 (同上) 價[illegible]
◎枯川隨筆 (同上) 價二十錢
◎トルストイ翁 日露戰爭論 (平民社譯) 價八錢
◎小品 智識と趣味 ([illegible]) 價三十五錢

注文所 東京市麹町區有樂町三丁目 平民社
注文所 大阪市中の島 田簑橋南詰 平民社

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

●平民社より　堺生

▲幸德君もいよ〳〵廿八日には出て來る事になつた、オツカさんの喜び、細君の喜び、僕は先づそれを思ふ。次に幾千幾萬の同志、幾十幾百の友人の喜びが思はれる。それから又僕一身の喜び社中諸子の心としては、此の永の五ヶ月間、曲りなりにも兎にかく留守を仕遂げたかと思ふと、實に嬉しくて堪らない。幸德君が出て來たからとて、直ぐにうるさい仕事をさせうでは無けれども、出て來て居ると思へば、それだけで既に千人の心地がするのだ。諸君もドウゾ御安心下さい。

▲然しまだ一人殘つて居る。西川君が殘つて居る。彼れは今後更に二ヶ月の坐禪を修せねばならぬのだ。それを思へば嬉しい何のと贅澤を云つて、ナマケては居られない譯合だ。僕は魯鈍なりと雖も敢て自ら鞭撻を加へて居る。

▲ナラソの配布は存外の好成績で、最初刷つた分は疾くに賣切れとなり、直ぐに數千枚再版した。續々御注文を乞ふ。

▲編輯局の大花瓶には、例の黑田氏の厚志の色々、曰く檜扇、曰く桔梗、曰く女郎花、曰く蝦夷菊、曰く虎の尾。

▲僕は去十四日、半年ぶりに我が女兒眞柄を見るべく靜岡に行つた。一番町の靜かな家の、裏庭の井戸ばたの扇檜の木の下で、月を見ながら行水を遣つて、翌朝は寢床の中で老鶯の啼くのを聽いた。僕は僕の子の口よりチヂサンと呼ばれて居る。

▲高島米三郎君から僕に宛てゝ左の通りの手紙が來た

一大分熱くなつたが同志諸君變つた事も無いかね。此間何かの雜誌で仙崎が木下君の火の柱を大へん賞めていたから一度讀んで見度いと思つて居つたが。……此間丁酉會で仙崎に逢ひ又そこへ桑木も來たから火の柱と眞人の自白の評を聞いて見たら（桑木は小說と云へば殆んど缺かさず讀むから僕はその噂を聞くのが常である）兩人とも中々ほめる、特に眞人の自白は上篇より下篇の方がいよ〳〵文章がなだらかになつてほんとの小說らしくなつて居る、恐らくは木下君は小說家になるであらうとまで言うて居つた。そこで僕は早速中西屋に注文して兩書とも取寄せて讀み始めた所が、眞正に手、卷を釋くに忍びずで、度々喫飯時を過して細君に叱られた。火の柱は今日の女學生には是非一讀させたいと思ふ。いづれ纒めて出來る丈け多く買つて僕の敎へた女子に分與してやりたいと思つて居る。今夜は車の中と人力車の上とで眞人の自白の上篇を讀み了つた所である。これから歸つて今夜は中篇の爲めに徹宵するつもりである。試驗　採點をあちらこちらから催促されて閉口して居る。君今日の試驗などいふドライ極まる事の爲に此の不生產的な採點の骨折をやるのに實に馬鹿氣て居るからナア。どうも眞人の自白は僕の關係して居る學校の教育上の治安妨害らしい。否僕の家庭の食安妨害である。木下君によろしく言うてくれ玉へ、まだ逢はんけれども。

東京瓦斯株式會社第四拾回決算報告

○貸借對照表

負債之部

一資本金	八、四〇〇、〇〇〇・〇〇〇
一準備積立金	二二九、〇〇〇・〇〇〇
一別途積立金	一六六、四三〇・六二四
一契約保證預金	一八、四二四・七〇〇
一身元保證預金	七〇、七七一・二四〇
一仕拂手形勘定	一三二、四八一・一七〇
一未拂金勘定	一七七、八二六・三九二
一假受勘定	三三、八八三・三一一
一前期繰越金	四四、七八二・一一〇
一當期利益金	四六九、四一二・五七〇
合計金	九、七四三、〇一二・一一七

資産之部

一未拂込資本金	三、一五〇、〇〇〇・〇〇〇
一興業費勘定	四、八五八、七九一・八七二
內譯　地所	一一〇、〇〇五・八八八
內譯　建物	五一六、一九四・三四三
內譯　諸機械	一、四六四、四七七・三六六
內譯　鐵管	二、三二四、一五〇・七一八
內譯　街燈	五〇、三二九・二五五
內譯　貸付器具	三九三、六三四・三〇二
一興業費未決算勘定	二九四、〇四九・五七〇
一興業用品勘定	一九三、四六〇・二二二
一營業用品勘定	一五七、〇二八・七九〇
一營業貸勘定	一四五、四七二・四七九
一假拂勘定	六、三八九・九五六
一受取手形勘定	三六、三八六・六二三
一有價證券	六〇六、〇〇四・五〇〇
一銀行預金勘定	二八〇、四八七・四九〇
一現金在高	一四、九四〇・六一五
合計金	九、七四三、〇一二・一一七

○損益計算書

一當期總收入金	一、一八八、六二二・三八七
一當期總支出金	七一九、二〇九・八一七
差引利益金	四六九、四一二・五七〇

○利益分配計算書

一當期利益金	四六九、四一二・五七〇
一前期繰越金	四四、七八二・一一〇
合計金	五一四、一九四・六八〇
一賞與金	三七、五五三・〇〇六
一準備積立金	二六、〇〇〇・〇〇〇
一別途積立金	三三、五六九・三七六
一株主配當金（年一割五分ノ割）	三四一、二〇八・〇〇〇
一後期繰越金	七五、八六四・二九八
合計金	五一四、一九四・六八〇

右之通ニ候也

明治卅八年七月

東京瓦斯株式會社

取締役會長　澁澤榮一
常務取締役　高松豐吉
取締役　淺野總一郎
同　大橋新太郎
同　渡邊福三郎
同　袴田喜四郎
監査役　渡部朔
同　小林藤右衛門
同　伊藤幹一

右調査候處相違無之候也

斯波貞吉編述（袖珍美本）

小品千題　知識と趣味

▲定價卅五錢郵稅不要▼

△現代最新の智識と、滑稽諷刺の妙味と、併せ收めて、小品千題中にあり、已に是れ避暑消閑の好侶伴なり、敢て世の讀書子の愛玩に供す、

發行所　東京市根津宮永町廿六　平民書房
取次處　東京市麹町區有樂町三　平民社

●齒科治療　自午前八時至午後六時●

神田區須田町二十六番地　齒科醫　吉瀨才一郎

勞働者諸君に限り藥價診察料共御隨意　晝間執業者の便利上夜間十時迄治療仕候

麻病せうかち根治神劑　快麻丸

本劑は一等軍醫正草刈先生の處方に據り藥劑師田所崇松謹製せし者にて輕きは一週間如何なる難症にても一ヶ月にて根治せしむる特効保證の神劑なり

價　三日分十五錢　七日分三十錢　●十五日分六十錢　●一月分一圓

東京市中は即刻配達す●全國郵料並達す

發賣　神田區富川町一番地　電話本局三千四十番　一志堂藥局

家庭雜誌

●本誌の特色●

健全の思想改革の氣象
清新の趣味親切の教訓
平易の文章通俗の說明

之れ本誌の自ら任ずる所也

△一部六錢●六部卅二錢●十二冊六十錢郵稅不要●見本切手六錢

發行所　東京市芝區新堀町卅番地　由分社

福田英子女史

妾の半生涯　●第四版●

▲大阪事件の女傑景山英子、今や福田未亡人として自ら其半生涯を語る▲彼は如何にして爆裂彈を懷くに至りし乎▲彼は其間に於て何人に情を寄せたりし乎▲彼は何人に於て其戀を失ひ、何人に於て更に其愛を得たりし乎▲彼の獄中生活は如何に奇なりし乎▲彼は如何に其後の廿年を過したる乎▲彼は如何にして四人の子の母となりたる乎▲彼は如何にして最後の失望の間より更に新光明を認め得たる乎▲彼は卒直に、大胆に、淡白に、悉く自ら之を語れり▲定價三十五錢、郵稅六錢

發賣所　東京神田表神保町　上田屋

活版印刷

東京築地　株式會社　國光社

電話新橋　二六九三番
特電話　八八番

觀世流のうたひ教授

麹町區有樂町一丁目五番地

毎日午前午後　東脩金壹圓　月謝壹圓五拾錢　土居香海

精神界

毎月一回（十日）發行

第五卷・第七號概目

▲ベルツの釋尊●同盟の力●之によりて佛息をおもひ●之によりて我道にすゝまむ●佛影●梅雨中の成熟●世の凡てを讓るとも信念を讓るなかれ●トルストイ氏の信念を敲いて清澤先生の遺訓を懷ふ（安藤州一）●恭敬心の開展（多田鼎）●宗教統一編（曉烏敏）●淨教獨立論（佐々木月樵）其他

定價　一册金十二錢　六册金六十五錢　郵稅不要

發行所　東京府下巣鴨村九七九　浩々洞

田岡嶺雲著

うろこ雲

定價[illegible]　郵稅[illegible]

嶺雲は天上の子也、是地を厭ふと雖ども、是れ地上の人非らず、皷翼雲を起して、往々紫霄に冲せんとす、其嘔心嘔骨して出す處の如き、字々委く火を吐き焔を吹く、文字の熱して赤きこと鐵の如きは、蓋し其天分に出づ、咳唾珠玉を成すは、嶺雲の文にあらず、吸噓悉く紅火、是れ其文也、地に燃えて火となり、天に翔つて日となる、飛冲上昇を性とす、是れ地上の物には非らず（國府犀東序文の一節）

發行所　東京市下谷中根岸七五　嵩山房

（胃病）良藥　慈善散（じぜんさん）　一日分三ぷくみにて一錢金二錢

遠方の人には十日分まで郵稅二錢で送る、代價も郵便切手で宜し

東京市淺草上平右衛門町十四番地　靜岡より轉居　富田慈善堂

辯護士　今村力三郎

東京市神田區今川小路二丁目十四番地　電話本局一九四〇

外科皮膚病梅毒科的婦人科尿道痳疾外科器械的療法

診察　午前九時より十二時まで

東京　新橋際出雲橋　加藤病院　電話新橋二二〇

院長　獨國醫學士　加藤時次郎

分院　横濱神奈川臺　火木土自午後三時至六時　小田原海岸　每月曜午前中

▲本紙定價　一部三錢五厘、廿部前金六十五錢、五十部前金一圓六十錢、郵稅不要
▲廣告料　一行十九字詰三十錢
▲注文　は總べて前金に限る
▲郵券代用（にて御送金の場合は必ず一割增とし成るべく五厘の郵券を用ひられたし）

發行兼編輯人　原眞一郎
印刷人　山田金市郎
發行所　東京府荏原郡入新井村字新井宿二千五百七番地　直言社
發賣所　東京市麹町區有樂町三丁目　平民社　電話（本）三一六二
印刷所　京橋區西紺屋町二十一番地　株式會社　國光社　電話新橋特八八、新橋一六九三